

収蔵品で語る宮代の民俗2

藍色の風景



宮代町郷土資料館

開催期間：平成20年4月26日(土)～7月13日(日)



開催にあたって

わたしたちの身のまわりにある色は、無限の広がりを持って表現されています。例えば一口に「青色」といっても、日本古来から愛用されてきた青色には多くの種類があります。

近年、日本で「青色」といえば、サッカーを始めとする日本代表のユニフォームの色「ジャパン・ブルー」が有名です。「ジャパン・ブルー」とは「日本の青」という意味ですが、明治時代の初めに日本政府の招きで来日した英国の化学者アトキンソンが、当時の日本のいたるところで見られた藍染めの着物の色に「ジャパン・ブルー」と名付けたことに由来します。

また、日本における「青色」は、着物だけではなくありません。収蔵品を見てみますと、「染付」と呼ばれる、青色で模様が描かれた陶磁器が数多くあります。割れた小さな皿でも漆などで接合してあり、大切に使用されていた様子がわかります。

今回の展示では、「藍色の風景」と題し、収蔵品の中からこの「青色」をテーマに紹介しております。日々の生活の中における「藍色」の使われ方や、日本古来の美意識などについて見つめ直すきっかけになれば幸いです。



平成20年4月

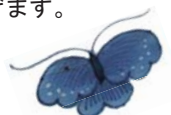
宮代町教育委員会
教育長 桐川弘子

～凡 例～

1. 本書は、平成20年4月26日から7月13日まで開催される、宮代町郷土資料館平成20年度第1回企画展「収蔵品で語る宮代の民俗 藍色の風景」の展示図録です。
2. 展示の企画及びポスター・図録の執筆、写真撮影、デザイン、編集は、当館学芸員横内美穂が担当しました。
3. 資料の中には、紙面の関係で図録に掲載できなかった資料もあります。
4. 企画展の開催にあたっては、下記の方々より寄贈いただいた資料を使用させていただきました。掲載以外の方々からも多くの資料が資料館に寄贈・寄託されております。関係の皆様のご御理解・御協力に厚く御礼申し上げます。

展示資料の寄贈者(敬称略、五十音順)

金子和生 金子三春 小島雅郎 鷺谷国雄 高畑博 成田秀雄



藍色の器-1



白い素地に呉須(酸化コバルト)で文様を描いた「染付」と呼ばれる陶磁器は、中国からその技法が伝わり、17世紀の始め頃に肥前の有田を中心にその生産が始まりました。その後、19世紀の始めに瀬戸でも染付の生産に成功し、文政11年(1828年)に起きた有田の大火による陶工の離散も加わって日本全国に染付の技術が広まり、江戸時代の後半には、染付は一般的な食器となりました。

このコーナーで展示している器は、日常的に使われたものばかりではなく、冠婚葬祭など特別な機会に使用されたと思われる器が多く含まれています。その場合、10個、20個といったある程度の数が揃えられているようですが、当時の陶磁器は高価なものであったため、このようにたくさんの数を揃えておくことは大変なことでした。そのため、裕福な商家や名主などの村役を勤めていた家が保有していたり、地域の人が共同で購入したりするなどして、いざ必要な時のために大切に保管してきました。



1. 染付微塵唐草文なます皿



2. 染付微塵唐草文猪口

3. 染付二鶴図八角皿

裏の高台部分を見ると、ろくろで作られたと思われる跡が見られます。



4. 染付二鹿遊山図中皿

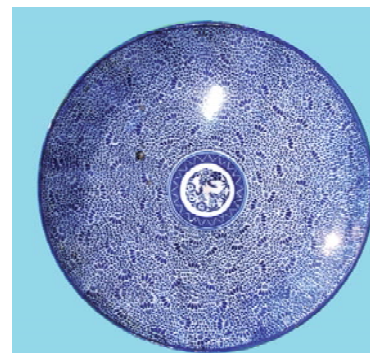
このお皿は4枚ありますが、鹿の描き方や松の数が違うなど、どれも微妙に筆づかいが異なります。



5. 染付雲竜兔鶴飛蝶唐草文大皿

龍・兔をはじめとして、「めでたい」とされる模様がいっぱい描かれた大皿です。

表面が削られ、「魚てつ」の文字が見えます。刺身や煮魚など、仕出しのお料理がのっていたのかもしれないね。



6. 印判手染付微塵唐草文大皿

印判手の技法の中で、型紙を使って模様を描いたものと思われます。中央部分に多くの瑕が見られますが、包丁のような鋭利な刃物による瑕のようです。盛りつけた物を切り分けたりしたのでしょうか。

藍色の器-2



8. 染付牡丹図大徳利

9. 印判手染付竹花捻文大皿



印判手の技法の中で、型紙を使って模様を描いたものであると思われます。中央部分に多くの瑕が見られますが、包丁のような鋭利な刃物による瑕のようです。盛りつけた物を切り分けたりしたのでしょうか。

11. 染付松図盃



これらの盃は5個ずつありますが、どれも微妙に大きさが違ってきます。型などを使わずに作られたことや、焼成の時の収縮率の違いなどが、その理由ではないかと考えられます。

14. 染付杜若図猪口



16. 九谷焼染付人物山水図湯呑(部分)

割れてしまった部分を漆と金で接合し直す「金継ぎ」が施されています。割れても直せるうちは大事に使用していた様子がうかがえますね。



18. 染付蘇鉄図花入



いつの世も同じかもしれませんが、職人の技術や芸術性が高いものや、時代を経たものの中には、「使用する」対象から「鑑賞する」対象へと、存在する理由が変化する場合があります。今回の企画展で皆さんがご覧になっている資料のすべては、「使用する」目的から「資料として歴史を伝える」という目的へと、まさにその存在理由が変えられたものです。

このコーナーに展示した器は実際に使用されていたものですが、「使用する」という本来の目的とは別に、描かれた絵を楽しんだり、置かれたときの姿を見て楽しんだりされていたものでもあるようです。

このように、展示品を含め資料館で収蔵している資料をみていくと、私たちが日常的によく使用しているような物ほど、資料として少ないことに気が付きます。例えば、食事に使用している食器や、歯磨きに使用している歯ブラシやコップ、学校に行くときに身につける洋服や靴やランドセルなど、普段の生活で何気なく、しかも当たり前のように使っている物ほど、壊れれば捨てられてしまい、気が付いたときには記憶の中にしか存在しないものとなっています。もしかすると、これまでの歴史の中で、もっとも身近な物ほど資料として残りにくい時代になっているかもしれませんね。



藍色の日常着・仕事着

明治8年、明治政府に招かれて来日し、東京開成学校(後の東京帝国大学)で教鞭をとったイギリス人化学者ウィリアム・アトキンソンは、染料の研究をしていたことでも知られていますが、日本全国のいたるところで人々が「青色衣装」つまり藍染めによる着物を着ていたことに驚きました。一般的に英語では藍色のことを「インディゴ」と言いますが、彼は藍染めにより表現される青色の幅広さと深みにも注目し、日本特有の藍色を「ジャパン・ブルー」と名付けました。同じ頃に来日したラフカディオ・ハーン(小泉八雲)も、その初来日の印象を記した著書『東洋の第一日』のなかで、「青い屋根の小さな家屋、青いのれんのかかった小さな店舗、その前で青い着物姿の小柄な売り子が微笑んでいる。(中略)着物の多数を占める濃紺色は、のれんにも同じように幅を利かせている。」※1と記しているように、日本では藍染めの日常着や仕事着が一般的であった様子がうかがえます。

藍染めの布は、虫や蛇を寄せ付けないといわれ、殺菌効果があるとも考えられていました。藍の葉そのものが食あたり・熱冷ましなどの民間療法に使われていたなど、日常生活において藍は大変重宝され、野良作業や大工などの作業着として、藍染めの着物が使われるようになったのかもしれない。※1・角川ソフィア文庫「新編 日本の面影」ラフカディオ・ハーン=著・池田雅之=訳 より引用



19. 染付松笹図水差



21. 九谷焼染付唾壺

唾壺とは、もともとはつばやたんなどを吐き捨てるための器で、古くは平安時代に編さんされた「延喜式」や「和名類聚抄」などにも示されています。のちに、その実用性はなくなり、室内の装飾品として置かれるようになりました

22. 染付水草鯉図盃洗

盃洗とは、文字通りに酒席で盃を洗うための器のことです。日本では昔から、相手と心を通わす手段の一つとして、盃をやりとりすることがあります。盃洗はその時に使用されました。



この資料には鯉の絵が描かれていますが、ここに水が張られると、あたかも実際に鯉が泳いでいるような趣になり、粋な感じがしますね



17. 東山焼染付燭台

東山焼は、姫路藩のお庭焼きとして江戸時代に始まり、明治15年まで焼かれていました。

25. 浴衣



26. 浴衣



28. ノラジバン(男性用)

藍染めの布は、蛇や害虫を寄せ付けないといわれました。そのため、野良着などによく使用されました



29. モモヒキ(男性用)

布を織る前の糸の状態の時に藍染めで染められたと思われます。糸の染め上がりが部分的に違うことから、織り上げたときに縞状に見えます。このことから、「青縞」と呼ばれています



30. 印半纏(百間 野口材木店)



33. 印半纏(永塚工務店)

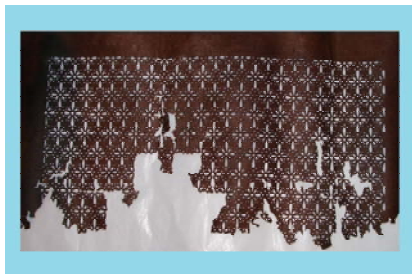


34. 印半纏(百間山 西光院)

あいぞ こうや
藍染め職人「紺屋」

糸や布の染色を職業とする家を「紺屋」と呼びました。かつては宮代町にも百間、中島、逆井、藤曾根などの地域に紺屋がありました。衣服が和装中心であった頃には、自宅で作った絹や木綿の糸を染めてもらって布を織ったり、あるいは織り上げた布を染めてもらって着物を仕立てたり、さらには手持ちの着物を染め替えて仕立て直すなど、染色を要する機会が多くありました。そのために、地域における紺屋の存在は大変重要でした。

しかし、昭和20年代を境に衣服が洋装化し、安価で色数が多く発色の良い化学染料が染め物の主流となるに伴って藍染めの需要も減少し、全国的に紺屋は姿を消していきました。宮代町においても昭和30年代初頭を最後に廃業した紺屋がほとんどで、いまでは藍染めを行なう紺屋はなくなりました。

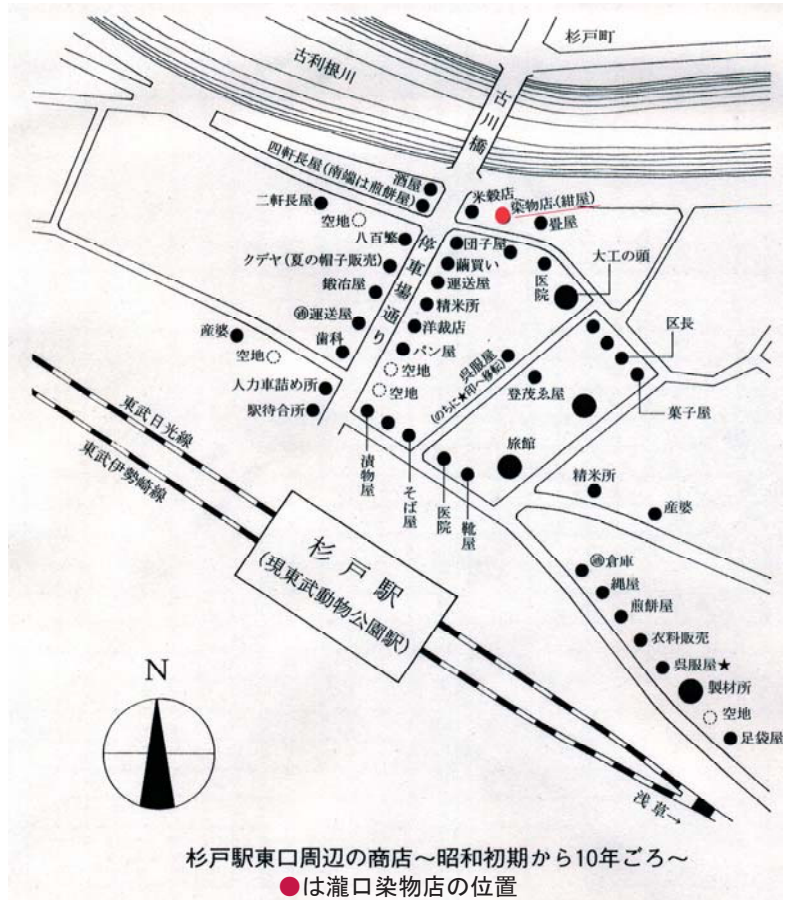


38. 型紙(部分)

37. ノリオキヘラ



39. 紺屋の包み紙(部分)



杉戸駅東口周辺の商店～昭和初期から10年ごろ～
●は瀧口染物店の位置

番号	資料名	時代	旧蔵者	番号	資料名	時代	旧蔵者
1	染付微塵唐草文なます皿	明治時代	小島雅郎氏	21	九谷焼染付唾壺	明治時代	小島雅郎氏
2	染付微塵唐草文猪口	江戸時代	小島雅郎氏	22	染付水草鯉図盃洗	江戸時代	小島雅郎氏
3	染付二鶴図八角皿	江戸時代	小島雅郎氏	23	染付青花図盃洗	江戸時代	小島雅郎氏
4	染付二鹿遊山図中皿	江戸時代	小島雅郎氏	24	染付牡丹唐草文蓋物	江戸時代	小島雅郎氏
5	染付雲竜亀鴨飛蝶唐草文大皿	江戸時代	金子三春氏	25	浴衣	昭和時代	高畑博氏
6	印判手染付微塵唐草文大皿	明治時代	金子三春氏	26	浴衣	昭和時代	高畑博氏
7	染付松竹梅図大皿	江戸時代	金子三春氏	27	ノラジバン(女性用)	昭和時代	金子和生氏
8	染付牡丹図大德利	明治時代	鷲谷国雄氏	28	ノラジバン(男性用)	昭和時代	高畑博氏
9	印判手染付竹花捻文大皿	明治時代	金子三春氏	29	モモヒキ(男性用)	昭和時代	高畑博氏
10	印判手染付扇面草花図大皿	明治時代	金子三春氏	30	印半纏(百間 野口材木店)	昭和20～30年代	金子和生氏
11	染付盃 いろいろ	江戸～明治時代	小島雅郎氏	31	印半纏(宮代建築 あづま建設)	昭和20～30年代	金子和生氏
12	染付文箱桜花図盃	江戸時代	小島雅郎氏	32	印半纏(百間 折原本家)	昭和20～30年代	金子和生氏
13	染付松図盃	江戸時代	小島雅郎氏	33	印半纏(永塚工務店)	昭和20～30年代	金子和生氏
14	染付杜若図猪口	江戸時代	小島雅郎氏	34	印半纏(百間山 西光院)	昭和20～30年代	金子和生氏
15	染付飛竜図蛸唐草文飯碗	江戸時代	小島雅郎氏	35	印半纏用反物(宮代建築 あづま建設)	昭和20～30年代	金子和生氏
16	九谷焼染付人物山水図湯呑	江戸時代	小島雅郎氏	36	印半纏用反物(永塚工務店)	昭和20～30年代	金子和生氏
17	東山焼染付燭台	明治時代初期	小島雅郎氏	37	ノリオキヘラ	昭和20～30年代	関根 勳氏
18	染付蘇鉄図花入	江戸時代	小島雅郎氏	38	型紙	昭和20～30年代	関根 勳氏
19	染付松笹図水差	江戸時代	小島雅郎氏	39	紺屋の包み紙(瀧口染物店)	昭和20～30年代	金子和生氏
20	染付菊花雲竜文蓋付壺	明治時代	小島雅郎氏				



発行 宮代町郷土資料館

〒345-0817

埼玉県南埼玉郡宮代町字西原289

TEL 0480-34-8882 FAX 0480-32-5601

<http://www.town.miyashiro.saitama.jp>